

活とを比較し、従来のイメージとは異なった点について述べた。

今回の報告では、外国人留学生の日常生活についての具体的な傾向や類型を示すことは出来なかったが、インタビュー調査では幅広く詳細な回答

を得られたために質的に満足できるものになったと思う。今回の調査結果を紹介することにより、多くの日本人学生が彼らの生活や考えに興味を抱いて、彼らとの積極的な交流を試みることを望む。

グリーンツーリズムの可能性 ——北海道蘭越町を事例に——

清水 友美

私がテーマとして取り上げた「グリーンツーリズム」とは、団体で観光名所をまわるような従来の観光旅行とは異なり、都市生活者が農村で自然観察や農業体験をしながらゆっくりと過ごすものである。ヨーロッパではあたりまえとなった言葉だが、日本では最近聞かれるようになった。その理由として「総合保養地域整備法」の失敗や、農業経営状況の悪化などが挙げられている。以上の詳細を論文の前半で述べた。

後半では実際にファームインを行っている農家の聞き取り調査をすることで、理念として語られていることと事実との相違や、理想と現実の間のギャップを明らかにした。

筆者が感じた「グリーンツーリズム」の実現に欠かせない条件とは、まず受け入れ側である農村が豊かな自然を持つことである。ありのままの自然は都市住民にとってくつろぎをもたらすものといえるようだ。次に、地域と都市の住民のふれあいが必要だ。都市住民にとっては農業体験などを通じ、都会では得られない知識を身につけることができる。地域住民にとっては農産物消費者からの貴重な意見を聞くことができ、産地直送ルート開拓へのはずみとなる。それだけではなく、地域の良さを再発見するきっかけにもなる。さらには受け入れ地域全体でお客をもてなし、受け入れる雰囲気や体制作りを整える必要がある。地域全体で盛り上げていくことは地域活性化につながるはずである。最後

に付け加えたいのは、「グリーンツーリズム」を行うには、農業経営の安定が必要だということだ。これは前半で述べた「グリーンツーリズム」の成立理由の一つに挙げた「観光収入からの収益で農家経営を安定させるため」とは、矛盾しているといえる。しかし、実際の農家の意識は、現在がどんなに苦しくとも本業は農業であり、今後も多角化や法人化などの工夫で乗り切っていくつもりだということであった。あくまでも「グリーンツーリズム」を副業の域にとどめておこうとする姿勢を感じた。

以上のような条件を実現し、「グリーンツーリズム」の普及を図るには、様々な課題点も浮かび上がった。まず、「グリーンツーリズム」の効果は、上に述べたように様々であり、収入や観光客数の増加など、効果を数字に表せるものだけに限定してはならないといえる。さらに、個々の農家と行政の間にはまだ「グリーンツーリズム」の認識に隔たりがあるのが現実であった。しかし、両者の連携は不可欠であり、行政は「グリーンツーリズム」推進のためバックアップ体制を整えるとともに、意識改革をはからなければならないであろう。最後の課題は、地域にどのようなお客をどのようにして呼び込むかをしっかり検討したうえで、宣伝しなければならないという点である。ファームインの性格上、利用客数には限りがあり、口コミの広がりこそ期待していくべきであろう。